教職課程センター紀要　第５号　201-203 ページ、2020 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.5 201-203, 2020

研究ノート

障害を抱えた学生への中国語教育の一事例

A Case Study on Teaching Chinese to Having Physical Disability Student

田村　新

TAMURA Arata

Key words:感音性難聴，唇，図解

1. はじめに

本稿は筆者が 2018 年に担当したある中国語[1]の授業での実践報告である。この学生[2]は生まれつき難聴を抱えた学生である。一回目の授業の終了直後に，この学生自身が難聴であることを話してくれた。以前ある大学で同じように難聴を抱えた学生のいる授業を担当しそうになったことがあるが[3]，その際には大学からあらかじめ情報を得ていたので，心づもりはできていた。しかし，今回は突然の事であり，全く準備のない状況で，次の週から授業をしなければならない。本稿では筆者の準備の期間と実際の授業での教育実践を紹介するものである。読者諸兄の批判を仰ぎ，今後の教育活動への糧となればと願う次第である。

2. 難聴について

この学生とのファーストコンタクトは難聴であることを伝えられたことであった。その際，この学生は自身の学籍番号と氏名を言うが,筆者は全く聞き取れなかった。このことから，障害の程度は重いのではないかとの認識はできた。筆者は難聴を抱える学生にどのように対応すべきなのか全く見当がつかない。そこで，難聴について知ることから始めた。

植村 2001:51 によれば聴覚障害は医学的視点から①伝音性難聴、②感音性難聴、③混合性難聴の三種類に分類されるという。聴覚器官のどの部分に障害があるかによって分類をしている。つまり，外耳および中耳のどこかに障害がある場合は伝音系難聴で，内耳から脳にかけてのどこかに障害がある場合を感音系難聴としている。斎藤 2002：5 によれば，伝音性難聴は音が小さく聞こえ，感音性難聴は音が小さいだけでなく途切れ，ゆがみ，また高音だけが聞きとれないという特徴があるという。後に大学側から出された文書によると，この学生は感音性難聴とのことである。つまり，大きな声で話せば良いというわけではないのである。

村瀬 2005 によれば聴覚障害者を理解するために次の 5 つの視点があるという。

①かのヘレン・ケラーは「聴覚障害と視覚障害をいずれか一つ選ぶとしたら、どちらを選択するか」ときかれ、即座に「視覚障害を」と答えたと言うが、聴覚の障害とはコミュニケーションの障害であり、極めて重篤な障害である。
②健常者の言語感覚並びに構文構造と聴覚障害者のそれは異なること。
③障害の程度、発現はさまざまであり、それらは生育環境、時代（口話法の強調から手話、指文字の表現を次第に認めるろう教育の時代的変遷）とも輻輳している。
④手話は伝統的手話と文法的手話、さらに独自の身振り手振りなどさまざまである。
⑤適切な教育､養育が損なわれている場合が多いこと。
（村瀬 2005：6）

このような資料を目にすると，中国語を教えることは可能なのかと考えてしまう。実際にどの程度聞き取りなどに問題があるのかこの学生と面談をすることにした。

3. 学生面談について

この学生が履修する「中国語基礎」は週２回の授業で，1を日本人教員が,2をネイティブスピーカーの教員が担当する。そこで，2を担当されるネイティブスピーカーの先生が出講される火曜日にこの学生の面談を行った。中国語は声調言語である。音の高低が識別できるか否かは非常に重要である。そこで，どこまで聞き分けられるのかを試してみた。また，単母音を聞き分けられるかも確かめた。中国語には６種類の単母音[4]がある。単母音“i”“ü”は似たような音色の音のため，日本人学習者にとってよく聞き間違える音である。また，単母音“o”“e”“u”も先に紹介したペアほどではないが，似ているので聞き間違えることがある。しかしながら，唇のわずかな形の違いで区別をすることが可能である。そのため，筆者が授業をする際には，唇の違いを強調している。学生支援課の職員の話からもこの学生が唇を見て話しを理解しているとの情報も得ていた。そこで，どこまで唇の形を見分けられるか確かめた。

面談の結果，次のことが分かった。

①音の高い低いは聞き分けられる。
②音が高音から低音に，また，その逆の変化の聞き分けには難がある。
③単母音はいずれも聞き分けることができた。

しかしながら，唇を手で覆い見えない状態で同じように発音すると聞き分けられなかった。つまり，この学生にとって唇の動きというのは大きな情報を持つツールなのである。

また、面接では筆者が期末試験の際に，聞き取りの問題を２割入れている事を説明した。この学生はその場合には静かなところで改めて受験をさせてほしいという要望が出たので，そのようにすることにした。

4. 筆者の準備

次に筆者がどのような授業準備をしたのか紹介したい。難聴を抱えた学生に対して授業をするのは初めてのことであり，どのように指導するのが良いのか資料を探すところから始めた。そのうちの一つが永野 2017 である。母音の指導、半母音の指導、各種子音の指導法と示唆に富む内容ではあるが，他の学生もいる中で実践するには難があるように感じた。

また，説明を視覚的に捉えてもらうことで学習効果を高めるのではないかと考え，中国語の発音に特化した参考書を集め，参考資料として紹介する準備を行おうとした。唇を使い発音する「唇音」や「舌尖音」[5]はどの参考書の図もほぼ同じで，問題はないように思えた。しかし，中国語の独特な発音の一つである「そり舌音」の図示は三者三様であった。かえって混乱をさせると思われ，断念した。最終的には普段筆者が行っている授業を、どのように視覚化するかを考えることとした。

5. 授業での実践

実際の授業では次のような点に注意をした。

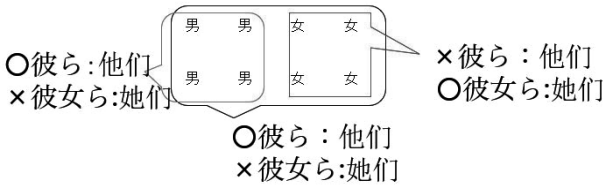
・発音の説明
　(1-1) 声調を手の動きで表す
　(1-2) 必要以上にオーバーに唇を動かす
　(1-3) 口腔図や母音図を用い説明する
　(1-4) 発音の説明を一言で板書する
・発音の矯正
　(2-1) まず，発音したものを受容する
　(2-2) 唇の形を意識するように指導する
・文法事項の説明
　(3) 口頭での説明をイメージ化して板書する

(1-1)は普段の授業では声調を教える際には板書をするが，それ以外の時には口頭での説明のみで済ましていた。(1-2) と (1-3) は普段の授業でも用いている方法である[6]。(1-4) も普段は口頭での説明のみだが，視覚化するために板書をした。

(2-1) は中野・吉野 1999：13 の紹介にヒントを得たものである。発音矯正は教場での非常に重要な作業だと思われるが，矯正をすることで，かえって発音をさせにくくするという学習者の情意的側面を応用したものである。しかしながら，(2-2) にあげたように、唇の形だけは意識するように指導をした。

(3) は例えば次のように行った。中国語には三人称の複数を表す表現に“他们”と“她们”がある。“他们”は女性がいる集団でも使用可能であるが，“她们”は男性がいる集団では使用できない。普段は口頭で説明するが，それを図１のように図示した。

図１



このようにして文法事項についてイメージ化をするように心がけた。

6. 教育効果について

最後にこのような授業実戦の結果どのような成果が認められたのか紹介したい。

筆者は授業ごとにリアクションペーパーを書かせている。子音の発音方法を教えた授業でのこの学生のリアクションペーパーで「舌の使い方や位置の図がとてもわかりやすく助かりました。中国語の前に日本語の五十音も子どもの時に教えてもらいたかったくらいです。」と述べており，一定の成果があったようだ。

学生との面談で述べたように筆者は期末試験の際には筆記 8 割，聞きとり 2 割の割合で試験を行う。筆記試験に関しては前期､後期ともに平均よりも高い得点だった。特に後期は平均点より 15 点高い得点だった。

聞き取りの試験では前期と後期に違いが見られた。前期は聞き取りの平均点が 10.0 点で,この学生は平均に届かなかった。やはり難聴であることが影響したのかと思われる｡後期の期末試験においても前期と同様に 20 点分の聞き取りの問題を出題した[7]。難易度は前期に比べ高いはずである。平均点が 7.6 点であることからもこのことが裏付けられる。ところがこの学生の得点は平均より上であった。筆記を合わせた総合得点についてもこの学生は上位者となり，優秀な成績で単位を取得するに至った。障害を抱えながらも大学に入るだけのことがあり，この学生のモチベーションは相当高く，この本人の高い学習意欲が，ここまで成長させたと思われる。

期末試験終了後，この学生にインタビューをした。音の高低の変化が聞き分けにくかったとのことである。しかし，高いか低いかという違いは以前よりも聞き取れるようになったという。聞き取りの能力は向上しており，訓練を続ければ高低の変化もおそらく聞き分けられるようになると思われる。そのことをこの学生に話したところ，続けて頑張りたいとの事でモチベーションをさらに高めることができたように思われる。

7. まとめ

筆者は以前，極度の弱視の生徒に中国語を教えたことがある。この生徒も非常に優秀な成績を収めていた。障害の種類によって得意な作業や不得意な作業というのはあるだろう。しかしながら，結局のところ，学習の成果を収めるか否かということは本人の努力次第というところが大きいと思われる。教員としては，障害を抱えた学生に対し，ちょっとした配慮をすることで，学習意欲を高めさせ，本人の努力へ結びつかせることが求められているように思われる。

注

[1]本稿でいう｢中国語｣は中国の標準語である“普通话”を指す。なお，この授業は 16 名が履修していた。

[2]この学生は文学部に所属する学生である｡本人には教育実践などでの一事例として報告をすることについて許可を得ているが，実名を挙げず，この学生と呼ぶこととする。

[3]後になって，授業の履修を辞退したとのことで，教えることはなかった。

[4]発音を表すローマ字（ピンイン）でかくと 6 つの母音は“a”“o”“e”“i”“u”“ü”の 6 種類。また，“er”も単母音とする場合があるが，本稿では先の 6 種類を単母音として考える。

[5]中国語学では「唇音」は両唇を使用するものと，上歯と下唇を使用する音であり,「舌尖音」は歯茎と前舌を使用し調音するものを指す。

[6]母音図については田村新 2019 を参照されたい。

[7]単語の聞き取り 5 題と中国語の質問を聞きとり,その答えを書く問題 5 題を出題した。

参考文献

村瀬嘉代子 2005.『聴覚障害者への統合的アプローチ』。東京：日本評論社。

中野善達・吉野公喜 1999. 『聴覚障害の心理』。東京：田研出版。

永野哲郎 2017.『聴覚障害児の発音・発語指導』。東京：ジアース教育新社。

斎藤佐和監修・白澤麻弓・徳田克己 2002.『聴覚障害学生サポートガイドブック』東京：日本医療企画。

田村新 2019.「ピンインの誤読とその対処法について-中国語初学者に対する教育実践」,大東文化大学教職課程センター『教職課程センター紀要』4:125-128 頁。

植村英晴 2001.『聴覚障害者福祉・教育と手話通訳』。東京：中央法規出版。

付記

本稿は 2019 年 7 月 31 日に大東文化会館で開催された中国語分野教育研究会,ならびに 2019 年 10 月 14 日外国語学部 FD 研究発表会での発表に加筆修正を行ったものである。